

横浜歴史博物館 (仮称)

平成5年9月

第3号

開館準備 ニュース



センター北駅からみた建設工事中の横浜歴史博物館 (仮称) (平成5年8月撮影)



常設展示室

常設展示室前の廊下



順調に進む建築工事

横浜歴史博物館 (仮称) の建築工事は、順調に進んでいます。上の写真のように、足場が組まれているため見づらい部分もありますが、完成時の姿をおおよそイメージして頂けるようになったのではないのでしょうか。年度末に刊行を予定している第4号では、竣工直前の姿をお見せできることとおもいます。また、常設展示室をはじめとする内装工事についても、横の写真のように順調に進展しています。

INTERVIEW

インタビュー ● わが心のふるさと

自然と文化を肌で感じて育ちました。

千住真理子 ● ヴァイオリニスト



生まれは東京の世田谷、六歳の時に緑区に越してきて、今でもここに住んでいます。祖父母と一緒に住んでいたんですが、祖母はもとも横浜の人でしたから、横浜に戻ったともいえます。ですから、私にとってふるさとといったら、やっぱり横浜ですね。

自然がたくさん残っていたのに、ずいぶん変わってしまったね。小学生の頃は、近所にタヌキや山犬、蛇がたくさんいたんですよ。外を歩くときは必ず兄と一緒にいくように言われていました。車に乗るときも、蛇が入ってこないように窓をきっちり閉めておかなきゃいけないって。でもお転婆でしたから、山登りや探検ごっこをして遊んでいました。今ではすっかり開けてしまってます。でも、自然と町が調和した感じで変わってきているので、うれしく思います。

祖母にはよく、開港後の横浜のことを聞かれました。海外からお船がきて、外国の人たちがたくさん歩いていて、貿易が盛んだった話ですね。だから私は、横浜に対して非常に活発で意気揚々とした港町、海外につながる街というイメージをもっていました。開内や中華街にもよく行きましたが、売っている物も食べ物も、歩いている人のファッションも、ほかの

街とはどこか違う異国情緒がありますよね。しかも、昔ながらの建物がそのまま残され、利用されているところが、横浜の素晴らしいところだと思います。

私が育った頃は、ちょうど情操教育が盛んな時期だったので、私も二歳半からヴァイオリンとピアノを習い始めました。周りに自然がいっぱいで、空気がきれいで、それでいて文化的雰囲気濃い横浜に越してきたことは、結果的によかったと思います。才能を育てるとしたら、環境が大切ですね。都会は便利だけど、自然や文化を肌で感じたり、心の余裕はもてませんから。

開港前の横浜については、あまりよく知りません。実際に外国に行ってみてわかったことですが、外国の人は横浜に対して大きな憧れをもっています。だから、この街に住んでいる私たちは、もっと横浜のことを知らなければいけないと思うんです。開港後のことだけでなく、その前のことも。今度できる博物館では、原始時代から開港前までの横浜が詳しく紹介されるということなので、とても楽しみです。外国の方も、きつとご覧になりたいんじゃないかしら。私も家からも近いので、ぜひ行ってみたいと思います。

(談)

史跡紹介

金沢区金沢町にある称名寺は金沢北条氏の菩提寺で、鎌倉時代の最盛期には、金堂・講堂・仁王門などの七堂伽藍を備えた壮麗な浄土曼陀羅にもとづく壮大な景観を呈していたことが元亨三年(一二三三)に描かれた「称名寺絵図並結界記」よりうかがえます。また称名寺は、多くの学僧を輩出し、金沢文庫の名でも広く知られています。

庭園は、金沢貞顕の時代、文保三年(一二三三)から翌年の元応二年にかけて性一法師によって造られた浄土庭園です。仁王門を入ると、池を東西に二分するように中島にかかる反り橋と平橋を通して金堂が

国指定史跡 ● 称名寺境内



のぞめます。

このような配置の庭園は、平安時代中期以降盛んになつており、岩手県平泉の毛越寺、福島県いわき市の白水阿弥陀堂等が知られています。毛越寺の庭園が、源頼朝が造営した鎌倉永福寺の庭園に影響を与え、さらに称名寺の庭園に発展してきたものと考えられています。

昭和五十三年から発掘調査が続けられ、それをもとに昭和六十一年から六十二年間にわたる復元整備が行われ、鎌倉時代の浄土庭園の姿を今に蘇らせています。

前号では常設展示室の概要について紹介しましたが、本号では引き続き各通史展示室の概要を紹介いたします。横浜歴史博物館（仮称）の通史展示は、「横浜に生きた人々の歴史」を基本理念として、それを具体化した「変わる横浜の形」「村に生きる人々」「人と物の流れ」という三つの要素から構成されています。原始Ⅰ・原始Ⅱ・古代・中世・近世・近現代の各室とも、それぞれの時代を象徴する大型模型を中央に置きます。また、入口から向かって左側、中央、向かって右側という三つの展示コーナーを設け、それぞれ先述した要素をふまえた展示を行っています。

原始Ⅰ ●展示室

原始Ⅰ展示室では、先土器時代（約二〇、〇〇〇～一二、〇〇〇年前）と縄文時代（約一二、〇〇〇～二、三〇〇年前）の横浜の歴史を紹介します。この二つの時代は、まだ農耕が生活の中心になる前、つまり人々が自然の恵みに頼りながら生活を営んでいた時代です。

先土器時代のコーナーでは、展示室の中央に大型模型として横浜地域で最も古い（約二〇、〇〇〇年前）生活の痕跡が見つかった、旭区「矢指谷遺跡」の地層断面模型を置いています。向かって左側には、「ナウマンゾウ」などの大きな獣たちがすんでいた氷河期の自然環境、そしてその環境の中で、素朴な「石器」を用い、狩りを中心とした暮らしを営んでいた、先土器時代の生活の様子を展示します。縄文時代のコーナーでは、氷河期が終わり、急激に気候が暖かくなるなかで展開した縄文時代の生活の様子を展示します。展示室中央には、横浜市の代表的な縄文時代のムラの一つであ



る港北区「南堀貝塚」の大型模型を置きました。中央と向かって右側のコーナーには、「土器の誕生のなぞや、狩りや漁、貝や

木の葉の採集などに支えられていた人々の暮らしぶり、当時の土器や石材の交流などについて展示します。

原始Ⅱ ●展示室

原始Ⅱ展示室では、「大塚・歳勝土遺跡」の時代である横浜の弥生時代（二、三〇〇～一、七〇〇年前）について紹介します。弥生時代は、稲作が生活の中心になったと同時に、金属器が使われはじめた時代です。弥生時代には、これらの新しい技術によって、人口が増加し、大きなムラもたくさん作られるようになりしました。しかし一方で、弥生時代は、水田やコメ、金属器といった財産ができたことで、それらをめぐる人々の争いが活発になった時代でもありました。

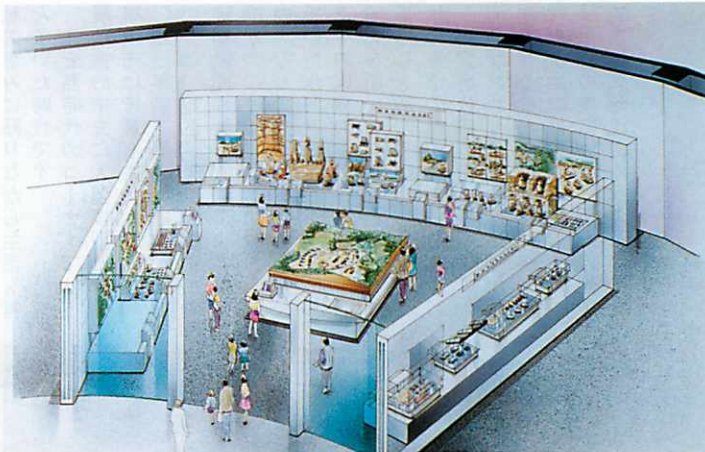


原始Ⅱ展示室では、展示室の中央に横浜の弥生時代を象徴する、国指定史跡「大塚・歳勝土遺跡」の大型模型を置いています。向かって左側では、無人に近い土地に突如として遺跡が増加する、横浜の弥生時代のはじまり方や、稲作を中心に畑作や木の葉の採集、狩りや漁などが組みあわさった弥生時代の「なわい」を展示します。中央では、ムラを守るための濠をめぐらせた「環濠集落」の中の暮らしぶりを復元したり、横浜でも活発化していた、水田やコメ、金属器などをめぐる人々の争いの状況を示しています。また向かって右側では、環濠集落というムラの形の原形を探ったり、次の古墳時代へと移り変わる時期の弥生土器の交流関係について展示します。

通史展示室紹介

古代の展示室では、四世紀から十二世紀までの横浜の歴史を紹介しています。この時期は、ムラを統合したリーダーたちの大きな墓が造られた古墳時代と、律令という法律に基づいて国家が運営され、政治が行われた律令時代、の二つに大きくわけられます。リーダーや国家の役人のもと、古代の横浜の人々がどのような生活を送っていたのか。この点を中心に展示していきます。

展示室中央には、市域西北部にあった「都筑郡衙」を復元した大型模型を置いていきます。郡衙は地方支配の拠点となる役所で、律令時代を象徴するものです。向かって左側では、古墳時代における開発の変化を古墳の変化や分布との関係でみていきます。特に谷戸部への開発の進展と「横穴」との関係に力点を置いていきます。中央のコーナーでは、古墳時代と律令時代それぞれのムラの様子と生活のあり様を、発掘資料をもとに示します。古墳に捧げられた品々、鉄製の農具や武具、須恵器・土師器という食器、信仰や祭りのすがた、墓地の様子、リーダー・役人とムラ人とのかわりなど、ムラを取り巻くいろいろな様子を見ることができま。向かって右側では、様々な物が税として、郡衙を出発点に奈良の都まで運ばれ、逆に都から銭や新しい技術がもたらされた様子を展開します。最後に、良馬と製鉄技術を手に入れた人々が力を伸ばし、やがて武士になる過程を映像を交えて展開し、次の時代――中世へいざないます。



古代●展示室



中世●展示室

中世の展示室では、十二世紀末から十六世紀におよぶ鎌倉時代から室町時代までの横浜の歴史を紹介いたします。この時代は、

源頼朝が鎌倉に幕府を開き武士による政治がはじまってから、徳川家康が江戸幕府を開くまでの時代です。武士による新しい政治のもと、中世の横浜の人々がどのような生活をおくったのか。この点を中心に展示します。

展示室中央には、中世横浜の海の玄関口で、文化・交易・産業の中心地であった、「六浦」地域の地形を復元した大型模型を置いていきます。六浦は、鎌倉幕府が開かれてから、鎌倉の外港として、中国との貿易、江戸内湾の交易でさかえ、武士や商人、職人、宗教者などが多数集まり、賑わいをみせた地域です。

向かって左側では、鎌倉時代から室町時代における、人と物の流れを鎌倉道と海外交易に力点を置いてみていきます。中央のコーナーでは、中世の庶民のいきいきとした日常生活を、人々が使った道具や、物の値段の現在のと比較によってみていきます。また、さまざまな信仰生活の様子を十王信仰に代表させていきます。向かって右側では、土地開発のようすを鶴見寺尾郷を中心に展開します。この他、中世の村の分布。横浜村という名称がはじめてあらわれる資料の紹介。そして、最後に、中世末の戦乱の時代、ふだんは農業をおこなっていた庶民が、戦いにかりだされ、物資を運んだり、雑兵として使われたりする状況もみていきます。

通史展示室紹介

近世の展示室では、戦国時代が終わり、天下が統一された十六世紀末から、横浜が開港する十九世紀の半ばまでの、横浜の歴史を紹介しています。この時代は、江戸幕府による全国支配が行なわれ、社会は比較的安定していました。そうした中で、それまで戦いに向けられていたエネルギーが耕地の開発へと向けられ、人々の生活はしだいに向上していきました。市域には、日本の大動脈である東海道があり、神奈川・保土ヶ谷・戸塚

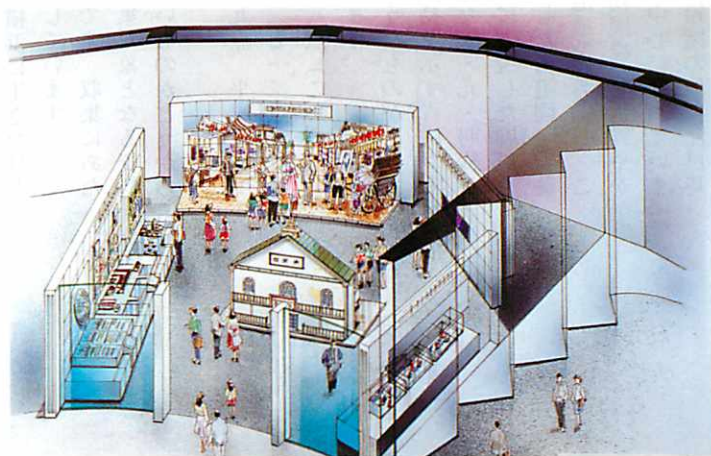


という三つの宿がおかれていました。また、神奈川湊を通して江戸内湾はもとより、太平洋沿岸の各地と交易が行なわれていました。

展示室の中央には、当時の東海道神奈川宿の賑わいを物語る、茶屋「桜屋」の大型模型を置いてあります。向かって左側には、近世における横浜地域の耕地開発の主要なものであった海岸部の新田開発の様子と、そのなかでも最も有名な吉田新田の開発をみていきます。中央のコーナーでは、生活と生産のまとまりであった村における人々のくらしをみていきます。向かって右側では、東海道やその他の街道を行き交う人々や、神奈川宿の繁栄ぶり、神奈川湊と各地との海上交通についてみていきます。

近世●展示室

近現代●展示室



近現代の展示室では、十九世紀後半から明治、大正、昭和を経て平成にいたる現在までの横浜の歴史を人々の暮らしを中心に紹介します。開港して日本と世界とを結ぶ窓口となった横浜には海外から新しい文化や制度がもたらされ、人々の生活を変えてきました。また大正期以降横浜は震災や戦災といった苦難をのりこえて現在のような成長を果たしてきました。横浜の市民はこのような大きな変化やうねりの中でいきいきと生活してきました。

展示室中央の大型模型では明治後期に伊勢佐木町にあった勤工場「横濱館」をとりあげました。勤工場は様々な商品を扱う今というデパートのことで、新しい文化を求める人々で大変賑わったといわれています。

向かって左側では横浜の開港と波止場のある関内に集まる人々と貿易品を扱っていきます。中央のコーナーでは、まず当時の伊勢佐木町の情景を再現し、集まる人々やその風俗の多様さを扱っていきます。次に横浜の郊外部の生活の様子をみていきます。ここでは港北区域の村をモデルに明治後期の農村の暮らしを描いていきます。

向かって右側では大正期から現在までの横浜の景観や生活の移り変わりを当時の写真等を用いて六面マルチビデオで紹介していきます。

横浜歴史博物館(仮称)

資料収集 の 概要



しろりんずじ
白綾子地水流草花模様打掛

横浜歴史博物館(仮称)の開館へ向けての本格的な資料収集は、平成二年度から始まりました。収集の基本理念は「横浜に生きた人々の生活と文化」でありそれを具体化した方針として、(1)交通・交易に関する資料、(2)横浜の景観(姿)に関する資料、(3)庶民の信仰と文化に関する資料の収集に力を入れています。特に開港期頃までの横浜に生きた様々な人々の生活・文化を知るための資料を広く収集しています。

収集の主たる方法は、寄贈、寄託、購入の三つです。収集にあたっては、学識経験者による審査委員会を設け、収集対象となる資料が横浜歴史博物館(仮称)が収蔵するにふさわしいものかどうかの審査を行っています。

収集資料の点数は、平成二年度には二〇件三十九点、平成三年度には四十一件二七七七点、平成四年度には二十件三七一二点を収集し、現在では収集資料の点数は、八十一件六五二八八点(このうち、寄贈資料は二十三件、三二六二点)にのぼっています。

これまでに収集した資料の主なものには次のようなものがあります。

(1)に関する資料としては、中世の中国との貿易を示す青磁算木香炉、青磁刻花牡丹唐草文壺、中国から輸入された宋・元・明銭があります。近世では、東海道の全体をパノラマ的に表現した屏風、絵巻物。宿場間の距離、関所、名所旧跡などを記した街道図。安藤広重の紅英堂版「東海道五十三次名所図会」、「東海道遊歴双六」。この双六と密接に関係する「東海道五十三次名所名物図絵」。色鮮やかな浮世絵・版画類など、東海道に関係した資料が中心になっています。

(2)に関する資料としては、近世の武蔵国の国絵図の他、江戸時代の本牧本郷村の様子を生き生きと伝える耕地図があります。

(3)に



東海道五十三次名所名物図絵

県指定重要文化財

コラム

じんめんつき ど き 人面付土器

〔鶴見区上台遺跡出土〕

弥生時代の人々は、どんな顔立ちをしていたのでしょうか。現在では、骨から昔の人々の人相をある程度復元できるようになってきましたが、弥生時代人たちは骨以外にも、すばらしい自画像を残してくれています。

鶴見区上台遺跡から発見された「人面付土器」は、顔を立体的に、かつリアルに表現した珍しいものです。筋の通った鼻、キリリとした眉と目、立派な耳とあご。りりしい弥生時代の男性の顔が浮か



んできます。

有名な「魏志倭人伝」には、倭人たちが入れ墨をしていたことが書かれています。しかし、この人物には入れ墨がありません。また、この土器の首と頭の部分には、丸い飾りが並んでいます。これは首飾り、頭飾りを表現したものでしょう。人面付土器は、このような当時の習俗についても、いろいろなことを教えてくれるのです。

博物館では、人面付土器の複製を展示する予定です。みなさんも、この「弥生人」に会いにきませんか。



東海道絵巻物

関しては、横浜の地に足跡を残した誠拙周楞の墨蹟。横浜開港の父と称される佐久間象山の書画・書簡（横浜から妻の順に宛てた書簡も多く含まれています）・印のコレクションが主要なものです。また寄贈・寄託いただいた資料には、法隆寺百万塔（尖戸昌夫氏寄贈）、村芝居一座の衣装・道具・台本（石井芳彦氏寄贈）、江戸後期の武士が使用した具足・羽織・打掛・振袖（村社喜知男氏寄贈）、大山講御神酒棹（北山田町内会寄贈）、大山講まねき看板（青木正一氏寄託）などをはじめ、数多くの貴重な資料があります。

収集した資料を保管・管理し、公開していくのは博物館の役目です。これまでに収集した資料の一部は、平成五年二月に開催しました「財団収蔵資料展」で公開いたしました。今後は、常設展示、企画展示をはじめ、様々な博物館活動の中で活用していきます。

横浜歴史博物館（仮称）は、原始・古代から開港期頃までの横浜を主な対象としています。この時期に関する皆様方からの資料の寄贈・寄託をお待ちしております。



青磁算木香炉



さわやかになる、ひととき。

ALWAYS
Coca-Cola

開館へのあゆみ(3)

- 平成5年3月30日 財団平成4年度第2回評議員会
- 平成5年3月31日 財団平成4年度第2回理事会
- 平成5年5月31日 横溝屋敷運営委員会総会
- 平成5年6月28日 財団平成5年度第1回評議員会、博物館建設現地を視察
- 平成5年6月30日 財団平成5年度第1回理事会

編集後記

横浜歴史博物館(仮称)は、平成六年度中の開館を予定しています。博物館の建築工事は、平成五年度末の竣工をめざして順調に進んでいます。これからは本号で紹介した常設展示の最終的な確定といった作業がまわっています。来館した方々に展示の内容や意図をわかりやすく理解していただくためにいろいろな工夫をしたいと考えています。この他、企画展示室や図書閲覧室をはじめとする館内の設備や、体験学習や講演会といった開館後の活動についてもいろいろと議論を重ねています。

横浜歴史博物館(仮称)開館準備ニュース
第三号

●発行/平成五年九月三十日
●編集

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
〒二三一 横浜市中区万代町一―二―四
電話〇四五(六四一)二二〇四・二二〇六